

知佳子 令和6年11月度特別作品

広島市中区河原町 知佳子

河原町に暮らして三十年以上経った。少しずつ町に慣れ、知り合いも増えた。ビルが多い町だが、思いがけない所に自然が残り、町の人も、自然や草木を大切に暮らしている。近所のスーパーの買い物や、用事での外出の時に知り合いに出会うと「困果が生まれたよ」「紅葉が始まったよ」などと教えてくれる。そんなささやかな日常が、かけがえのない宝物だ。

実を付けしままの枝落ち野分晴  
花カンナ空き家に残るオートバイ  
玻璃越しに挨拶交はし赤まんま  
螢草抜かれしままに咲いてをり  
園児らに手を振り返し秋の空  
星の名を話しつ行く秋の夜  
公孫樹の実あらかた落ちて雨上がる  
黄葉のはじまる辺り雀来る  
鯉釣を二三歩離れ見てるたり  
鳥のごとくつぎつぎ散つて柿紅葉

《作品鑑賞》

あざみ

知佳子さんのお住まいは街中でありながら昔ながらの温かい村き合いがあり、情緒あるお暮らしのようです。平素よく川沿いを散歩されているのでしょうか、どの句も女らしい感性をこたわりなく詠まれ、詩的な世界です。そして、どの句にも色合いがはっきり浮かび、心に沁みました。

実を付けしままの枝落ち野分晴

吹きすさぶ台風の過ぎ去った後の光景は、物さびしさと哀愁がしみじみうかがえます。

園児らに手を振り返し秋の空

高い空の爽やかな中、園児とのやり取りに知佳子さんの温かさがあり、ほほえましいです。

鳥のごとくつぎつぎ散つて柿紅葉

鳥のごとくと柿紅葉の取合せ、足もとに降る鳥のごとくの比喩、落ちるさまの侘しさが感じられ、上手な表現です。とてもよい勉強をさせて頂きました。